

## 教育システム論(新課程)の授業実践

学校教育講座・露口健司

### I. 授業目標と構成

教育制度とそれを構成する教育法規の基礎を理解するとともに、そこで得た知識を活用し、現状の制度的・経営的課題解決の視座を探究することにある。

この目標を達成するため、本授業では、次のような授業構成を採用した。

①課題提示(5分)・・・1時間で解明にあたる課題を提示する。たとえば、学校を活性化するための新たな職の提案(第5回)、これからの教員にはどのような研修が必要か(第9回)等。

②説明(40分)・・・課題解決に関わる基本法規と基本情報を提供する。プレゼンテーション方式による説明であり、スライドの内容は事前に学生に配布されている。

③個人活動(15分)・・・課題に対する提案を個人で考える。ワークシートを活用する。

④チーム活動(15分)・・・グループ内で意見を集約し、ひとつの提案にまとめる。まとめた提案は、エントリーシートに記入し、教員まで提出する。

⑤報告と共有(15分)・・・教員によって選ばれた5チームが前で発表を行う。発表内容は、創造性・有用性・表現力の視点から学生が評価し、最後に挙手による相互評価を行う。最後の数分で教員がまとめを行い

### II. 授業内容

第1回ガイダンスと第15回試験を除く全13回の内容は、次の通りである。

①教育目標、②教育課程、③教員免許、④教員の職位、⑤教員採用、⑥教員社会の問題、⑦体罰と懲戒処分、⑧教員の服務、⑨研修体系、⑩指導力不足教員、⑪教員免許更新講習、⑫学校評価と教員評価、⑬学校選択とコミュニティスクール。授業の内容は、教育改革の動向に左右されるため、毎年大幅に変更している。

### III. 工夫した点

本授業では、特に次の4点を工夫している。

第1は、オリジナルワークシートの活用である。B4で1枚のワークシートは、全部で5つのゾーンより構成されている。すなわち、課題記入ゾーン(3行)。個人活動記入ゾーン(15行)。グループ活動・発言内容記録ゾーン。発表評価ゾーン(15行)。グループ活動等の反省記述ゾーン(15行)である。グループ活動等の反省記述は、授業時間内に行うことができないため、教室外学習にて行うこととなる。また、記述の量を評価対象とする旨を伝え、ワークシートが十分に記入ではていない学生は、教室外にて補充する。そのため、一定の教室外学習が保障される。

第2は、言語能力の育成である。本授業では、45分の説明の中で、資料や六法を「読む」活動が設定されている。また、後半45分の間はB4で1枚程度のワークシートをうめる「書く」活動が設定されている。さらに、グループ活動や報告過程では、「話す」「聞く」活動が設定されている。後述する授業評価では、この点の成果が多少現れているようである。

第3は、評価システムによる動機づけである。先のワークシートは60%の配点である。毎回きちんと出席し、ワークシートに取り組むことで60点は保障される。30%は、最終テストにおいて評価する。教育六法のみを持ち込んでの論述試験であるため、毎回の参加と丁寧な学習が必要不可欠である。そして、のこりの10%は、グループ発表による得点をあてる。学生による相互評価で高い得点を獲得することで、単位取得がさらに楽になる。最終試験の1発勝負ではなく、日々の努力の蓄積が必要であるため、学生の出席率は大変高い。出席率は97.5%(合計のべ出席者1,316名/必要のべ出席者数1,350名)であった。

第4は、時間配分である。教員の説明を

45分とし、学生の活動を45分間取り入れた。学習した知識を活用し、自分の意見を組み立てる。また、それをグループ内で協議する。ここには思考や判断の過程が内包されている。前半の45分をしっかりと聞いていないと後半の45分に参加できない。そのため、前半の説明にも耳を傾けることとなる。

#### IV. 授業評価の結果

上記の目標の到達状況を把握するために、授業評価(学習状況調査)を第14回目授業終了後に実施した。

尺度は、“ひじょうにあてはまる(4点)”～“全くあてはまらない(1点)”までの4件法である。回答者は89名であった。結果は下記の表に示す通りである。

---

1. 学校・教師の実情が理解できた……………	3.42 (86)
2. 学校の教育活動の根拠となっている基本法規 について理解できた……………	3.17 (79)
3. 教育法規に対する関心が高まった……………	2.97 (74)
4. 法律の視点で、学校教育を理解しようとする 意識が高まった……………	3.07 (77)
5. グループでの効果的な議論の方法が習得できた…	3.21 (80)
6. 自分の意見を明確に表現する能力が高まった…	3.01 (75)
7. 短時間で自分の意見をまとめて「書く」能力 が高まった……………	3.21 (80)
8. 「教師になりたい」という意識が高まった……………	2.46 (62)

---

各質問項目について、4件法の平均値とその結果を25倍した百分率表記(カッコ内の数値)を示している。

百分率表記が80ポイントを超えているものは、おおむねよい評価である。60-70ポイントは何らかの重要な課題があると考えられる項目である。60ポイント未満の場合は、抜本的な改革が必要な項目であると判断できる。

「1. 学校・教師の実情が理解できた(86)」「5. グループでの効果的な議論の方法が習得できた(80)」「7. 短時間で自分の意見をまとめて書く能力が高まった(80)」の3つについては、一定の評価が与えられているといえる。

また、「2. 学校の教育活動の根拠となっている基本法規について理解できた(79)」「4. 法律の視点で、学校教育を理解しようとする意識が高まった(77)」「6. 自分の意見を明確に表現する能力が高まっ

た(75)」「3. 教育法規に対する関心が高まった(74)」の4項目については、70ポイント後半のスコアとなっている。これらの知識理解・活用意欲・表現力・関心については、何らかの改善策を打つ必要があるといえる。

圧倒的に評価が低かった項目がひとつある。それが、「教師になりたいという意識が高まった(62)」である。この低スコアの理由としては次の2つの解釈が可能である。ひとつは、学校・教師の実情を理解する中で、従来の理想や希望にゆらぎが生じたとする解釈である。もうひとつは、従来から教職意欲が高くはないという解釈である。何かと学校・教師の課題の側面について語りがちであるが、もっと希望の側面について語る必要があるといえる。

#### V. 次年度以降の課題

以上のアンケートと自由記述結果等を踏まえ、次年度以降の課題についていくつか指摘しておきたい。

第1は、教職動機の向上である。この点はアンケート結果も示された通りである。ただし、これは新課程というシステムの問題でもあり、私個人の実践では限界がある。

第2は、発表チームの決定方法である。現在は、エントリーシートに書いた提案を、授業者1名が決定する方式を採用している。選定にかかる時間は2-3分程度である。この点に対する明確な不満は自由記述にはあらわれていないが、不満に思う学生も多数いるであろう。この点の改善策を考える必要がある。

第3は、時間配分である。代表チームの発表のあとに、授業者がまとめを行うが、その時間が大変短い。乱雑なまとめのまま授業が終了することもある。

第4は、授業中の奇声への対処である。一部の学生が、授業には相応しくない雰囲気醸し出している。他の学生とは明らかに異なる異様な雰囲気(ノリ)である。こうした学生にもっときちんと注意して欲しいとする自由記述が複数あった。学生たちも苦々しく感じていることが分かった。